

二〇二〇年三月二日の夢。テレビによくでる有名な司会者が飲み屋に一週間ぶりに訪ねてきた。彼はみんなに、銀色の錫すずでできたような「アラン・チューリングの指輪」と呼ばれるものを配っていた。それは人気の指輪で、人々が群がっており、多くの人がもらいにいった。私もすごく欲しかったが、人波にさらわれて、もらえない。銀色の分厚い指輪で、手の甲の部分は丸く装飾されており、その輪の中に×のような十字が描かれていた。

数学者のアラン・チューリングは一九五四年六月七日、四十二歳の誕生日の目前で自殺したことを、目覚めてから知った。

「向坂さん、おしっこ行きますか？」

「うーん、まだあんまり行きたくないんですけど……でも看護師さんがいらっしやる間に行っておこうかな」

真希は義理でおしっこに行つたにもかかわらず、こんなに長いおしっこはひさしぶりだと思うくらい、長いおしっこをした。

「あ、青い。おしっこが、青い」

「すみません、言うの忘れてました。センチネルのあとは、おしっこが青くなるんです。驚かせちゃってすみません」

本当に、トイレの洗浄薬と見まごうくらい、真っ青なおしっこだった。

「はあ、ちょっとびっくりしました」

真希は疲れていた。青いおしっこなんて、どうでもいいというくらい疲れていた。

「ちょっと疲れたんで、もう寝てもいいですか？」

麻酔が覚めたら、徐々に傷が痛み始めた。冷や汗のようなもので全身が湿っていた。体が自由にならず、息も絶え絶えだった。こんなに体が衰えていたら、いつコロナに罹ってもおかしくないな、と諦め気味に思った。でもそんなこと、今はどうでもよかった。激しく疲労し、早く休みたかった。

「おやすみなさい。何かあったら、ナースコールをしてください」少し硬質な感じのする女性看護師だったが、真希は感謝しかなかった。術後の患者を見慣れているだろう彼女は、するべきことをしっかりとこなして部屋を出ていった。そのことが真希に、自分の手術は人並みであることを告げていた。

真希は、駅前の大病院のベッドで横になった。窓から見えるのは、数々のビルディングにショッピングモール、競技場。コンクリートの巨大な塊。さいたま新都心の界限は、不自然なくらいに都市化していた。横浜郊外の住宅地出身の真希は、この作られた都会の雰囲気は圧倒され、なにか誇らしげな魅力すら感じていた。バブル時代に首都機能を移転させるためにつくられたこの街は、何もかもが異常にスケールが大きかった。ここはいつもなら人混みで溢れかえるはずの場所だが、二〇二〇年のエイプリルフールは人も光もまばらだった。

でも真希は、なんとなく気持ちに暖かさが戻った。線香花火のような、わずかな熱をこころに感じた。手術が終わった安心感も、もちろんあった。けれど一人では飲み込まれてしまうような巨大なコンクリートジャングルに対して、それが人が作ったんだというただ一点の事実には安堵を覚えた。

「私はそんなにヒューマニストだったのだろうか」

そんなことを思い、少し驚いた。いや、驚いた自分に驚いたと言ったほうが正確かもしれない。

真希はかなり血の気の多いタイプで、端から見れば、いわゆるヒューマニストでなければおかし
い人間だった。しかしまさにその血の気の多さゆえに、世界との接点に一抹の不安を抱えていた。
真希はその感性の過剰さゆえに、人間のことが怖いとも嫌いとも思うことがしばしばあった。

「私は人間が好きなのか、嫌いなのか」肺炎の流行で面会禁止の病室で、ひとり笑った。昼間の
大雨はやみ、夜になろうとしていた。

真希が初期の乳がんと診断されたのは、二〇二〇年の三月九日だった。その年の正月ごろ、近
所の氷川神社でもらった「身体健康」のお札が、地震で倒れた。真希は十年以上前に別の大病を
患ったため、「身体健康」の願いはいつも切実だった。

新しい家の書棚の一角に作った神棚には、家族の分のお札がいくつかあったが、倒れたのは真
希のものだけだった。この家の書棚は真っ白な表面加工をしたプラスチック製のポップな家具だ。
部屋一面に広がる艶のあるその白い書棚は、真希の新しい家をホワイトキューブのように現代的
にしていた。そういう脱呪術化した空間に神棚を置くのは、靈感の強い真希の矛盾した一面でも
あった。

その白い空間でお札が倒れ、真希は、正直かなりいやな予感がした。そういうことを一切気に
しないタイプの人々がいることを真希は知っていたし、実際、彼女は、ふだんの美術史の大学教

員としての仕事ではこういうことに影響されることがないように極力努めていた。でもいやな予感がすることは否定しがたかったし、そのことを真希はずっと忘れることができなかった。

遡ること一月の半ば、仕事が忙しい時期に時間をつくって職場でやる定期検診に行ったのだ。触診では異常がなく、いつも通り無事に終わるものと思いついて入っていた。真希は過去にSLEという膠原病の一種である免疫の大病を患ったことがあり、自分はもうそれ以上、健康上の苦勞はしないものと信じ込んでいた。真希の持論では、人生の不幸の総量は皆同じだった。「もう自分は十分不幸を経験した」、そう信じて疑わなかった。しかし検査から二週間後、そこに右の乳がんの可能性を指摘されたのである。

その月の末、大学の仕事を終えて帰ったら、薄い普通郵便が検診センターから届いていた。その郵便物の扱いの軽さで、すっかり誤解をしていた。「いつも通りの結果だ」、そう思った。しかし書かれていたのは「FAD局所的非対称性陰影(右)要精密検査」という見慣れないひとことの文言だった。封を開けたらそうとだけ書かれていたが、鏝を入れるまで、そんな診断が下つていようとは、思いもよらなかった。

真希は日記を読み返してみた。検診を受けた二〇二〇年一月十五日は、いやな夢を見たを書いてあった。昔、道端でつばを吐きかけてきた嫌な印象の男が、変な紙を自分の陣地に持ってきて、それを真希が必死で突き返す夢だった。あの当時、男の吐きかけた黄色いつばが足にかかって、

それを真水で穴があくほど拭い去ったのを覚えている。どれだけ洗つても、足に溶け込むような気がして、血が出るまで洗った。「ライバルに勝つ夢は、実際にはなかなか勝てないことを暗示している」真希がよく見る夢辞典にはそう書かれていた。

真希の祖母も、母も、乳がんサバイバーだった。彼らは苦労はしたが、片胸で今でも元気で生きている。「ああ私のものも、遺伝だな」でも二人とも、左胸の乳がんだった。「右……」「なんで右なんだろう」、真希はばかげていると思いつつも、自分にとって唯一の道しるべを失ったような気がして、不安を隠せなかった。

生き残っている人たちとは別の側の乳がんかもしれないことは、真希をうろたえさせた。「科学的ではない」ことは百も承知だった。しかし真希は、自分は普遍性や再現性のある科学の世界には生きていないと常々考えていた。

他人がどうか、確率がどうか、そんなことはどうでもよかった。黒と白が出る確率はそれぞれ二分の一、でも黒黒白白白白、黒白黒白黒白と出るのが「運」だと昔、数学者が言っているのを聞いたことがある。今、ここで黒が出るか、白が出るか、それは誰にも分からない。だからこそ、運命というものが、よりいつそう気になった。

白い書棚、白い壁、白いソファ、白いテーブルに囲まれた部屋で、真希はこんなところで「黒」が出る可能性があることに身の凍る思いがして、途方に暮れた。過去に免疫の大病を患っ

て以来、極力人生に不幸な要素が入り込まないように、微細な部分にまで気を遣ってきた。しかしそんな努力は、ほんの偶然のいたずらで、一瞬で水の泡となりうることを思い知った。